



講談社 1,500円

## 宗教からよむ「アメリカ」

森孝一著

(大学神学部教授)

信教の自由を保障するために政教分離を憲法修正条項に明記しているアメリカ合衆国には、実は「見えざる国教」が存在している。それは国家全体のアイデンティティや存在理由を規定する宗教的価値体系であり、多種多様な民族から成るアメリカが社会を統一するために必要な集団的信念である。本書は、この「見えざる国教」の分析を中心に、日本人には理解しにくいアメリカ社会の宗教的側面を鮮やかに描き出している。

第一章では、普段は潜在的なこの「国教」の実態が具体的に描写される。例えば大統領はそ

の大祭司の役割を果たしており、ワシントンDCはその聖地、独立宣言や憲法は聖典である。第二章では、この「国教」と対立関係にあるセクト的宗教として、モルモン教、アーミッシュ、人民寺院、ブランチ・デビディアンが分析される。第三章はフアンダメンタリズムを取り上げる。フアンダメンタリズムはアメリカ社会の世俗化を憂え、政治的手段を用いてまで伝統的な価値観を取り戻そうとしている。最後に著者は第四章で、これからの「見えざる国教」のあるべき姿として、グライド・メモリアル教会の実験を紹介する。そこでは一人一人の間が「絶対的なもの」の前で、人種の差異や経済的・政治的階層を超えて、あるがままの自分を表現している。本書はアメリカ社会の基底に存在している集団的潜在意識を理解するために不可欠の書である。

三宅威仁(大学神学部専任講師)



人文書院 6,953円

## 近代天皇制とキリスト教

土肥昭夫、田中真人編著

(大学神学部教授)(大学人文科学研究所教授)

第一部は「近代日本のキリスト教メディア」に見る天皇制で『基督教世界』など十教紙誌が分析の俎上に載せられ、第二部「主要キリスト者における天皇制」では新島襄をはじめ十名の主要なキリスト者が分析の対象になっている。「このような広範な研究は、これまでなされなかったこと(土井)である。

第一部では、一般に理解されている、天皇制下におけるキリスト教の抑圧というイメージとは異なり、キリスト教界が明治以降、天皇制国家に積極的になり寄っていった軌跡が浮き彫りにされている。評者は戦前の国

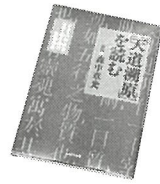
家神道体制の下で、キリスト教が公認宗教の一つとして天皇制国家を積極的に支えていたと見る立場に立っているが、それにしてもこれほどまでとは、というのが率直な印象であった。

もっとも、分析の対象とされたメディアはいわば合法の紙・誌であり、それはある意味では当然のことであると、第二部の主要キリスト者の分析に興味をつないだ。しかし、ここでも、分析されている十人が十人ともいづれ劣らぬ熱烈な親天皇・親皇室主義者だったことに深い感慨を覚えた。戦後の「象徴天皇制」を支える根深い岩盤の一つを見せつけられた思いである。

現代のキリスト者は「王(天皇)」の問題をどのように読み解いているのであろうか。

最後に第一部で分析されたメディアの史料、貴重な史料であり、史料集としての刊行が強く期待される。

中島三千男(神奈川大学教授)



かもがわ出版 2,400円

## 「天道溯源」を読む 森中章光訳注

本書は、米国長老教会の宣教師マーティンが、習いおぼえた中国語でしるしたキリスト教概論である。出版は一八五四年、まもなく日本に輸入され、日本語の適当なキリスト教書のなかった時代にひろく愛読された。本書をぬきにして、明治のキリスト教史は語れないであろう。現代とは違ったキリスト教弁証論の展開はまことに興味深い。同志社という点からいうと、本書があつて同志社がうまれたといつても過言ではない。同志社は、新島襄と初代京都府議会議長の山本覚馬との出会いがあ

つて出来たものであるが、この山本は新島と会う前に本書を読んでおり、そのキリスト教理解が新島の夢と呼応したのである。漢文の素養のうすい現代のわれわれには、本書をそのまま読むのは容易ではない。今度、刊行されたのは、森中章光さんによる和訳文（訓み下し）である。森中さんは同志社の創立者を敬愛し、同志社の歴史の研究に生涯を投じた人。森中さんにとって本書を読むことは、同志社創立期研究のための不可欠な作業であつたと思う。この和訳文が生前に出版できなかったのは残念であるが、死後五年、同志社女子大学の吉野政治さんによつてよい補訂がなされ、また、同志社香里高校の鏑木路易さん、荻原俊彦さんによる「山本覚馬の生涯と天道溯源」についての三つの論文をそえて出版されたことは感謝である。

幸日出男（大学名誉教授）



新潮社 1,300円

## 古代史の窓 森浩一著

（大学文学部教授）

近年の歴史学では、考古学・文献学などといったそれぞれの分野が個別に研究を行うのではなく、連携してひとつの研究を進める学際研究の動きが高まってきている。

森浩一教授は、この研究を既に四十年以上前から「古代学」として提唱し、自ら実践を重ねられてきた第一人者である。

本書はそのような学際研究の先覚者である著者が、邪馬台国、継体・磐井戦争など、古代史を代表する様々な出来事について、考古学の立場から倭人伝・記紀・風土記・延喜式をはじめ

として、源氏物語・将門記・扶桑略記までにおよぶ読解をすすめ、これまでに無い斬新な古代史像を描き出したものである。そして著者はさらにそれだけにとどまらず、文献学では見えなかつた重要なひとつの視点についても焦点をあてている。それが考古学と地域史である。

これまでの歴史学は文献に依拠してきたため、当然記録された地域のこと以外はわからなかつた。しかし著者は考古学の示す様々な事実から、「時にはそれほど耕作地をもたない小島や海岸の地域」なども、それぞれの時代において重要な役割を果たしていたことを明らかにしていくのである。

これらは考古学のみが明らかにし得る分野のひとつである。本書はその意味で、考古学が今後果たすべき役割について、多くの示唆を与えるものともなっている。

鋤柄俊夫（大学文学部嘱託講師）



有斐閣 1,957円

## 史 ヨーロッパ統合の政治

金丸輝男編

(大学法学部教授)

欧州の政治家には「顔」がある。統合に邁進するEC(当時)は、そのまま欧州の政治的リーダー達の活躍の舞台でもあった。クレーデンホーフ・カレルギー、モネ、シューマンら統合の父と呼ばれる人達、大陸主導の欧州統合に常に一線を画して存在感を主張したチャールズやサッチャーといったイギリスの政治家達、常に欧州統合の要であった歴代フランス大統領とドイツの首相、欧州議会を舞台に統合推進とECの民主化に生涯をかけたスピネリ、マーストリヒト条約によって政治統合の扉を開けたドロール前EU委員長

等々。欧州統合という歴史の実験に参画しつつ、彼らは何を考えていたのか。本書は、こうした政治家達の個人史と欧州統合史とを、縦糸と横糸にして織り成した新しい欧州統合の歴史書である。政治的リーダー達の立ちや業績を読みながら、彼らを取巻く環境としての欧州統合の理念やプロセスが同時に理解できてしまう。ともすれば複雑で難解なEUの制度や機能も、生身の人間である彼らがどう関わったかという視点から眺めることで咀嚼しやすいものとなり、それにコラムによる解説が味を添えている。国民国家を背負い、様々な国益を抱えながらも統合推進に一役買った欧州の政治家たち(中には統合のプレキー役と言われた政治家もいるが、彼らの息遣いが聞こえてくるようである。こういうEU統合史の一冊が待たれていた。

安江則子

(立命館大学政策科学部助教授)



山川出版社 2,600円

## 性に病む社会

「ドイツ」ある近代の軌跡

川越修著

(大学経済学部教授)

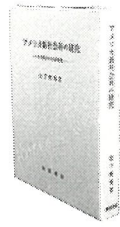
性というすぐれて個人的な営みに、かつてないほど大きな関心を抱き、その営みからの逸脱をめぐって、自らを自律的なシステムとして作り上げていく社会。われわれの生きる近代社会は、このような意味で「性に病む社会」としての相貌をもつ、というのが川越さんの姿勢だ。本書の舞台は、1880年代から1930年代にいたるドイツ。性病が結核につづく国民病として浮かび上がりつつあっ

た。性病をめぐる言説をとおして、性は、汚れているか否か、生殖に結びつくか否か、近代家族の営みに合致しているか否かなど、様々に分割され組み合わされていく。性は、種の生と個人の生活とが交差する、近代社会にとつての戦略拠点にはかならないからだ。

とりわけ「性病患者相談所」や「自己申告」をめぐる丹念な言説分析が示すように、川越さんの関心は「大衆社会としての近代社会」における「自己規律化」に注がれる。性病がわれわれの目の届かない形で社会化されることによって、かえって個人的な営みのなかに絶えず自身自身を見出さざるをえない関係に直面するからだ。

こうして本書の眼差しは、ナチス社会をもこえて、今日の日本に生きるわれわれのあり方にまで及んでくる。ぜひ手にとってほしい一冊だ。

中川 清(大学経済学部教授)



風間書房 14,420円

## アメリカ新社会科の研究

金子邦秀著  
(大学文学部教授)

本書は、一九九四年に広島大学に提出された学位論文を上梓したものであり、著者である金子氏の二十年間にわたるアメリカ新社会科の内容構成に関する研究成果が凝縮されている。アメリカ社会科の成立史の研究はいくつかあるが、一九六〇年代から一九七〇年代にかけてアメリカの教育内容現代化運動の成果としてあらわれた新社会科の研究を通して、社会科の科学的な認識の育成はどうあるべきかを論じた研究は本書が初めてといつてよい。

本書の内容は、研究の意義と

方法について述べた序章、社会科学の内容構成の課題という視点から新社会科の類型論を再検討した第一章、第一章において五つの類型に分けられた新社会科のプロジェクトから典型的な事例をとりあげて、科目構成、單元構成、教授・学習の過程や方法といった具体的なレベルでの内容構成を論じた第三章、第七章、および新社会科の特徴と問題を内容構成の視点から論じた終章からなっている。

社会科には、社会諸科学の概念やその探究方法の学習を通じて科学的な社会認識を育成しようとする要素と、価値判断や意思決定を合理的に行わせることによって市民的資質を育成しようとする要素がある。本書は、これら二つの要素を單元や授業として内容的にどう構成していけばよいのかを問い続けようとしている研究者・実践者にとって非常に有益な書である。

藤原孝章(大学文学部嘱託講師)



金星堂 3,500円

## 現代の言語学

石黒昭博、宇田千春

(大学文学部教授)(大学文学部専任講師)  
山内信幸ほか著  
(大学言語文化教育研究センター助教授)

生成文法理論の枠組の発表を契機にして、言語は従来の束縛から解放されたかのように多種多様な角度から研究されている。それにとまない言語学は隣接諸科学との連携を深めながら研究領域を拡げ、ますます研究のふところの深さを示している。

しかし言語学は依然として堅苦しい、近づきにくいものと考えられがちである。本書はこうした既成の一般的な言語学観をできる限り払拭し、「言語」そのものの持つ魅力を実感させながら、ごく自然に言語学の世界を理解し、言語に対する正しい認識と興味・関心を与えることを目ざして上梓された意欲的な著作である。

「言語学の情報を平易なことばで提供する」という編集方針が本書を見事に貫いている。平易なことばで高度の内容を分かり易く表現することは容易なことではない。著者の創意工夫に敬意を表したい。その一端は、たとえば各章の見出しが慣習的な用語をさげ、「音のすがた」「語のかたち」など親しみやすい用語で構成され、多様な情報が読み進むうちに自然にその術語とともに身につくように工夫されていること、しかも各解説は歴史的背景に基づいて最新の情報を伝えていることなどである。

本書は言語に関する格好の読物の特質を備えた研究書であり、また研究者には問題や課題の整理を容易にする好著でもある。

宮本英男(大学文学部教授)



鳥島社 2,800円

## 思考の手帖

東宏治著

(大学言語文化教育研究センター教授)

モンテニユは『エッセー』を約二十年間書き続けた。この『思考の手帖』は、筆者が二十歳の頃から三十年に渡って書き続けたきたものらしい。常時小さな手帖を携帯し、思考の閃光が弾けるたびにその場で書き記し、現在では二十冊目に及んでいるという。断章の内容は多彩であるが、大まかなテーマ(ぼくの「方法」の始まりとしての手帖・内界を照らしたす光としての言葉・死を忘れるな等十七項目)に分類されている。五文字の断片(思考の弁別)もあれば、見事に屹立している一行(感じたことを言葉にする―それが考え

るといふことだ、等)もあり、著者の思考の平面と不意に交差した邦文・仏文の引用もある。炸裂する思考の火花をその場で定着させようとした言葉だけに、断章はどれも数行の散文詩のように鋭利で短い。この短さは、そこに飛来した思考の速度、強度、深度と密接に関係しているのだらう。断章は、線香花火のように深い闇に小さな空際を穿ち、これら無数の火花は、もぐら塚のように沈黙の空間を縦横に走り、そこに点描的で妖艶な世界を浮かび上がらせている。この手帖は、若くして失った父親の死をきっかけに得た「方法」―世界をやがて死んでゆく人のように見る末期の視力の研磨―の実践であり、この世に初めて誕生したまなざしの航海日誌でもある。縦横に走る良質の知的刺激に満ちた無数の坑道が、無垢な視界に通じる清涼な通風路になっている。

穂藻充(大学文学部職託講師)



国文社 9,270円

## シェイマス・ヒーニー

全詩集 1966-1991

坂本完春、杉野徹ほか共訳

(大学文学部教授)(女子大学教授)

シェイマス・ヒーニー(一九三九―)は、英語文化圏、現代詩人の中で、もともと興味深い詩人の一人で、昨秋には、ノーベル文学賞が彼に贈られた。そのヒーニーの全詩集を、かつて同志社に学んだ四人の詩を愛する人たちが、膨大な「註」(七三七〜八八七ページ)をつけて日本語に翻訳した。それが「画的」と評されている本書である。

ちょうどヒーニーのノーベル賞受賞と訳詩の出版の時期が重

なったため、日本では英文学のアカデミズムの世界でも、現代詩を書く人たちの間でも、ヒーニーと訳詩とが同時に話題になり、『東京新聞』(一九九六年一月十六日)などには絶賛に近い書評が出たが、それも、当然のことといえるかもしれない。

実はこの四人―薬師川虹一、村田辰夫、坂本完春、杉野徹(敬称略)―は、長年にわたってオーソドックスな英詩を研究してきた人たちであり、平行的にイギリスの一流の現代詩人たち―ヒューズ、ガン、ラーキンなど―の翻訳を手がけてきた目の肥えた達人たちであり、呼吸のあったグループであるからである。

眼の確かさや、詩的きらめき、蘊蓄を感じさせる一冊である。なおヒーニーは、たそがれの美の国アイルランドで生まれ育ち、自然や人間にやさしい心づかいをする詩人である。

見玉実英(女子大学学長)